

第九章 日本魂禪

日本魂は此五尺の肉にあり

日本魂の本源は、文書にあらず、歴史物語にあらず、此五尺の肉である、此五尺の肉が日本帝國に生れたと云ふ。此公明正大の事實が、日本帝國に盡瘁すべき天の使命である。日本に生るゝは、生れざるべからざる因果の結果で自他を超越したる公明正大の出来事である。日本帝國に安心立命すべく、日本に生れたのである。吾等は偶然に日本に生れたるか、否な決して然らず。吾等は今始めめて、日本に生れたるか、否な決して然らず。吾等の五尺の肉は、千萬年を一貫したる肉である。畏れ多けれども、神代より現在に至るまで、日本人は日本人として、此肉を相續し來つた日本人である。個人を相續するにあらず、肉を相續するのである。行爲を相續するのである。先人の肉が因となりて後人に相續し、後人の肉が因となりて、未來の人に相續せられて、前因後果窮るところなくして、萬世無窮に相續せらるゝのである。日本人と云ふ三千年の肉が、其時、其機に縁起して、或は五千萬人となり、三千萬人となりて、個々獨立の如くに生死あれ

吾國の歴史は吾等の肉の歴史なり

維新志士の肉は不滅なる例

ども、是れ個人の人にあらずして、三千年の日本人の肉が個人と分るゝのである。此個人の人肉が又日本人の本源の肉に會通して、幾億年も個人人の如く生死あるのである。故に此個人は個人の実在にあらずして、三千年の肉の縁起である。神代より毫も消滅するところなき肉である。突然個人に發生したのではない。

此現在吾等五千萬人の同胞は、今明治に生れたるが始めにあらずして、建國以來此肉は日本に生れて、國家の爲めに精忠を盡して來たので今又陛下の爲めに盡瘁すべく、現代に生れたのである、故に吾國の歴史は、吾等の肉の歴史にして、吾等の肉が先人の肉である。吾等同胞が歴史を研究すると云ふは、實に自己の肉を研究するのである。先人の精忠無二の行爲は、歴史物語にあらずして、此吾等の肉である。是を維新志士の實例に求めんか。

渡邊華山が、刑餘生きて世に益なく、反て君主を累す、死するに如かすと、盧生黃梁一夢の圖を造りて屠腹したる、四十九年の肉も、又先生が、

麻繩にかゝる身よりも子を思ふ

禪學 森養

親の心をこくよしもかな
と、至孝を歌ひし此肉も、

高山彦九郎が、三條橋上に於て、草莽臣高山彦九郎と呼び、泣きつゝ伏して皇城を拜し、毎朝黍明水を浴び、屋上に坐して一日も廢せず、談一たび皇室の式微に及べば、慷慨悲憤、聲淚共に下り、

われをわれとしろしめすかやすめらきの

玉の御こゑのかゝるうれしさ

と、愛國の神心を漏す肉も、

梅田雲濱が、吉田松陰と會見し、水戸に到り、武田耕雲齋、金子等と謀議して、京都に歸り、

妻臥病床兒叫飢 挺身直欲當戎夷

今朝死別與生別 唯有皇天后土知

と、斷腸を吟じたる肉も、

吉田松陰が、年三十にして、斷頭場裡の露と化し、

山河襟帶自然城 東來無日不憶神京

今朝盟嗽拜鳳闕 鳳闕寂漠今非古

空有山河無變更 野人悲泣不能行

聞說今皇聖明德 敬天憐民發至誠

鷄鳴乃起親齋戒 祈掃妖夷致太平

從來英皇不世出 悠悠失機今公卿

人生如萍無定在 何日重拜天日明

此肉が或時は菅公と現じ維新志士と現じ吾等と現す

と、皇恩感慨の進る肉も、是れ毫も消滅するところなくして、現在五千萬人の同胞の肉に相續して居る。菅公の恩賜の御衣の披瀝したる肉と、維新志士の肉と、是れ二にあらずして一である。或時は菅公と現じ、或時は楠公と現じ、或時は鎌足卿と現じ、維新志士と現するは、其現するところの、人と時代は異れども、此肉は決して異なるものではない。其本源は日本人は日本人として一貫したる肉である。日本に生るゝは、此肉が生

るゝのである。

日露戦役に、大將とか中將とか言へる軍人は勿論のこと、昨日入營したる一兵卒も、未だ曾て教育を受けたことなき、山間僻地の老翁までも、國の爲めに盡すと云ふ、誠心誠意の日本魂の發動したるは、是れ發動すべき原因が、此肉に具るからである。打死にするも、陛下の爲めに此肉を捧げたるが故に、却て欣々然として、戦場の露と消ゆるは、是れ此肉が曾て、陛下の爲めに盡したるが故に、再び盡すも、歡喜の生ずるは、其因のあるところに、其果を生ずるからである。此肉の因が國家に盡したるが故に、果も盡すのである。日露の戦役に日本魂が一兵卒にも、充滿したるは、吾日本人の三千年の肉が一貫したりと云ふことを證明して餘りありと、斷言することが出来る。

東郷大將の肉、是れ楠氏の肉にあらざるか、一兵卒の肉、吉田松陰先生の分肉にはあらざるか。否、個人の肉が、個人に相續せらるゝものにあらず。肉に個人なるものなく、日本人に個人なるものなし、個人の肉と思ひ、個人の日本人と思へるは、肉其ものを知らずして、肉の縁起したる自我を見るからである。楠氏の肉は、淡川に打死すること

東郷大將の肉、
是れ楠氏の肉に
あらざるか

現代の肉が又未
來人の肉となる

同時に、楠氏個人を離れて、日本人の肉である、三千年の肉である。楠公の肉が、楠公の偉大なる丈、肉に偉大を生じて、百千萬人に感應する。維新志士の肉は楠公の肉が個々に分離されたかも知れない、維新志士の肉と、楠公の肉と、其時は異なれども同一である。日露の役の日本魂は、維新志士の日本魂にして、維新志士の肉が、日露の役の肉である。此現代の肉が、又未來日本人の肉となるから、現代の吾等の肉は、實に大切な肉である。若し吾等の肉が、三千年を一貫する肉に背きて、歴史を汚すが如き行爲あらんか、此肉の行爲は、又未來の肉を生ずるの因となるが故に、吾人同胞の肉は、飽まで三千年の肉を一貫せねばならぬ。

肉は三千年を一貫したるものなれども、此肉は因果の廻轉によりて、或時は不忠の臣を生じ、或時は有害なる肉を生ずるは、肉の罪にあらずして、肉を個人のもので執する自我の罪である。何分肉は三千年を一貫するも、此肉は個人に發動して、相續せらるゝ肉なるが故に、三千年の肉が個人の肉の如くなりて、不忠の臣も生ずれば、歴史に背く行爲を生ずる、故に大切なる問題は、此三千年の肉即ち歴史を發動する個人の行爲である、

各個人は其國土の肉を相續して愛國の本源と爲す事

肉より生ずる自我の行爲である。
殊に現今の如く、世界と交通し、人種雜然として、共同生活を爲す、外交の時に於て、日本人が日本人として、三千年一貫せる肉を相續すると云ふ事は最も大切なことである。若しも三千年の肉を忘れて、肉は個人實在のものとして、自我の行爲あらんか、全く歴史に背きて、萬國何れの肉とも知れざる、肉を未來に傳ふるに至るのである。日本人の肉が日本人を離れて世界の肉とならば、社會は秩序たる美觀を失ふて、國家制度なるものを根本より破壊するのである。米國人は米國人の肉を相續して愛國の本源を爲し、支那人は歴史上の肉に廻轉して、愛國の觀念を養ひ、英國人は英國の歴史に生きて、始めて英國人である。各個人が各國の肉を相續して、其國に生れたる愛國の上に、各國と交情して、始めて世界の秩然たる美觀たるを得るのである、日本人が他國の思想に感染せられて、歴史の肉を滅却するが如きことあらば、吾人同胞の憂や、是れより憂ふべきはないのである。世界交情の上に、巍然として日本人たる、三千年の一貫せる肉を、後人に相續せしめて始めて、日本人に生れたりと言ひ得るのである。此肉が日本魂の本

國家も此肉を離れて存在する理由がない

源である。此肉が二十年で勤王の爲めに斃るゝも、八十年で國家の爲めに斃るゝも、決して長短はない。唯國家の爲めに盡すと云ふ事が、年數に依らぬ、建國以來一貫したる日本人の肉の本面目である。此日本人の肉は日本國家を離れて生ずべき理由もなければ、國家も此肉を離れて存在すべき理由がない、此肉と此國家とは一對無二である。國土と吾等とは、人間と國土なるが故に異なるが如くなれども、人間の生ずべき理も、國土の生ずべき理も、更に異なることなき、因果の往來なるが故に、國土、吾等、二にして一、一にして二である。國土を離れて吾等は存在することは出來ぬ、此肉は直ちに國土の肉にして、個人の肉ではない。此肉を勤王の本源と自覺し、此肉を國家と自覺し、此肉を三千年不生不滅に相續すると徹見するが禪である。日本魂の端的、是れ禪である。此肉を健全にすれば、彼の幸徳等の危険思想の如きは、夢にだも發生すべきものではない。危険思想は病的である、身心二見の不調和より起る病的である。此肉を忘れ、自己を忘れ、公明正大の日本に生れたる、因果の眞理を忘れて、徒らに自己個見の、病的たる腦の、僅に思想するところに捉はれて、危険の説を吐くので、全く病的作用である。

幸徳等の危険思想は病的である

思想上の狂者である。是等狂人の生じたるは、教育に依ると雖も、實は體育を誤りたるより生じたる産物である。肉の不健全より來れる自然の結果である。肉の不健全なるものは、常識を逸するが常である。肉が不平等になると同時に、思想も不平等になる。現代の日本人に、幸徳等の危険思想と其説は異れども、狂態なる思想に捉はるゝ、非常識の病人は非常に澤山にある。是等は肉の不健全より生ずるので、此不健全の肉に、思想狂態を加ふる時、若し教育の一步を誤れば、全く常識に計るべからざる、狂者となりて、危険云ふべからざる者を生ずるは爲政者の、最も注意すべき事である。斯の如く、危険思想を唱ふる狂者、常識を逸する痴人を濟度するには、教育の力に信頼するも可なれども、先づ根本的の體育に向つて着眼せねばならぬ、此肉が健全にならねば、如何に教育者が喧々するも、爲政者が策を講ずるも、到底効を奏することを得ぬ。是れ其本源を正されば、支流を清むることを得ざるは當然なる結論である。日本魂禪は、此本源の肉に向つて注入し、此肉の健全に向つて、單刀直入に術を施すに存するのである。日本魂禪を日々に行へば、必ず身心が壯健になる、身心が壯健になれば

ば、此肉の三千年を一貫する其理をも、自覺して、危険思想の如き、狂的思想は夢にだも生ぜぬ。全く常識の發達したる人となるのである。此の日本魂禪は國家の清涼劑である。

日本魂禪は毎朝、床を出づるや寢衣のまゝ、(寢衣の儘、行ふときは薄衣にして、帯にて腹を締めざるが故に最も効力多し)、第九圖の如く正坐して。氣を沈め、全身の力を注ぎて、腹中一切の邪氣、鬱氣惡瓦斯等を吐く心持ちを以て、極大きく、ハアと腹中の何物をも吐出するのである。是を爲すこと三度、十分位正坐して、全身心の力を以て、手も足も腦も、全機關の血管の活動を生ずる勢を以て、

呼吸と、全身の氣合と、筋肉の活動と、三者を一度に、下腹のドン底に徹すべく、

ウーン(吽) ウーン(吽) ウーン(吽)

と、腹中に何物をも藏むべき勢を以て、是を爲す。是を爲すに注意すべきは、正坐を亂すべからず。呼吸のみ爲すにあらず。筋肉と氣合と呼吸の三者を一度に爲して、ウーンと下腹に徹して、長く引きて、

身◎心◎堅◎固◎の◎此◎肉◎は

しんじんけんこの、このにくは

と切つて、又前の如く、

叫 叫 叫

三度と繰返して、又唱へて曰く、

日◎本◎魂◎の◎結◎晶◎ぞ

やまとだましひの、けつしやうぞ

叫 叫 叫

三◎千◎年◎を◎一◎貫◎し

三せんねんをいくわんし

叫 叫 叫

不◎生◎不◎滅◎に◎相◎續◎す

ふしやうふめつにさうぞくす

叫 叫 叫

豊◎太◎閻◎も◎楠◎公◎も

ほうたいこうも、なんこうも

叫 叫 叫

興◎國◎維◎新◎の◎勳◎業◎も

こうこくゐしんの、くんげふも

叫 叫 叫

今◎現◎在◎の◎我◎國◎の

いまげんざいの、わがくにの

叫 叫 叫

吾◎等◎の◎肉◎に◎備◎は◎る◎ぞ

われらのにくに、そなはるぞ

叫 叫 叫

身◎心◎堅◎固◎の◎此◎肉◎は

しんじんけんこの、このにくは

叫 叫 叫

大◎和◎魂◎の◎結◎晶◎ぞ

やまとだましひの、けつしやうぞ

叫 叫 叫

斯◎の◎如◎く◎、◎行◎ひ◎終◎て◎、◎又◎前◎の◎如◎く◎、

ハ——ア

を三度、繰返して十分正坐して止む。寝衣のまま、行なふことを厭ふ人は、洗面して、最も空気が方に向つて、第十二圖の如く、大の字に立つて中庸を下腹に取りて、其下腹

より發動するが如く、全身心の力を込めて、先きの如く行ふのである。一九四

又夜床に入らんと欲するとき、斯の如く爲す。毎日二回、又は便宜、食後、一時間半を
經て、坐、立何れにても、好むところに行ふのである。
是を、行ふこと親切なれば、如何なる人にも、半月なせば、半月の快樂を覺へ。一月
爲せば一月の樂を得て、心身堅固となり、此肉の本面目を自覺して、死生に安心し、國
家に安心し、家庭に安心し得ることは、余が實驗上明かに保證するところである。
唯注意すべきは、始めより、身體の慣れざるに、餘りに熱心に行ふときは、從來習慣上
の身體が、急に變化を生ずる爲め、頭痛がしたり、腹痛が起つたり、胃に故障が生ず
るが如き、現象を呈するが故に、始め一二週間は、坐禪、按摩禪にて、靜かに練習し、緩
より急に、小より大に、細より麤に、一歩づつ秩序的に練習して、追々に此日本魂禪を
行へば、毎日愉快に行ひ得て、此肉のあらん限り、無病長生にして、國家の爲めに、盡
瘁することを得るのである。

此日本魂禪を、毎日、毎晩に行ふ効果は、實に偉大であつて、獨り自己の身體壯健にし

て、愉快なるのみならず、其爲す事業にも効果を生じ、家庭が圓滿に安心することが出
來るのである。尙偉大なる効果は、毎日是を行へば、知らず識らずの間に、小兒を感化
して、見聞の上に日本魂の何物たるかを解せしめ、國民教育の源泉を爲すの利益がある
から、是非毎朝夕、家庭に應用したいものである。尙重大なる効果がある、國家を廓清
するの基礎と爲すほどの、大切なる効果である。

是は第四章に述べたるが如く、此肉は何に依つて相續するかと云ふに、閨門感受に依りて
相續するのである。日本魂の肉は千古に生せず、滅せざるものなれども、發動して生死廻
轉がある。此生死の廻轉が父母の閨門に、緣起して力を生ずるのであるから、閨門が相續
の根本である。其閨門に感受するは、父母の其時の身心状態を根本とするから、父母が
此日本魂禪を、毎朝夕に行ふて、身心堅固なるときに妊娠せば、父母の身心状態が、日
本魂と云へる身心堅固の上にあるから、感受したる其兒も必ず、身心堅固の日本魂を具
有して生るのである。即ち父母の閨門に於ける、身心状態が其儘其兒に感受するので
ある。閨門に邪念あらんか、其時の胚胎兒は必ず不良兒である。閨門に禮讓あらんか、

人は生死に悲喜するにあらざる縁起に悲喜す

其時妊娠せられた兒は良兒である。是れ因果の命するところ、寸毫も味すことを得ぬ。此實例は拙著家庭と開運の、閨門の自覺に詳説してあるから、御参考が願ひたい。故に忠良の兒を得んとするも、孝子を得んとするも、不良兒を生むも、父母閨門の自由である。否な自然の感受である、故に閨門ほど大切なるところはない。國家を廓清せんと欲せば、先づ閨門を廓清せねばならぬ。閨門の感受正義なれば建國以來の誠忠の士の肉も行爲も、自ら縁起して其閨門に感應するのである。肉は不生不滅なれども縁起するところに、力を生ずる。現在吾人の肉が五十年とか百年に死するは、根本を滅却するのでなく、唯因果の廻轉である。縁に因りて閨門に發動し、縁に因りて死す、此縁起に生死ありと雖も、肉は滅すのものにもあらざれば、生ずるものでもない。若し徹底滅するものなれば生ずる理由がない。又徹底生じたものなれば滅する理由がない。然るに生死あるは、生ずるにもあらず、滅するにもあらず、原因結果の順環を假りに生死と名けた迄である、肉は千古不滅である。千古の吾人の肉が、生るゝを始めてとして祝し。死するを終りとして悲しむは、其縁起の始終に悲喜するものにして、生死に悲喜するのではな

い。其縁起は父母の閨門に發動するが故に閨門は千古の因果を廻轉せしむる、妙機妙用である。閨門に肉の善良なるもの不良なるものを感受し、發動することを自覺するは、實に大切なる問題である。國家を廓清するに、閨門を廓清するの大切なることは是れにて明瞭と信する。果して然れば、此日本魂禪を、毎朝夕に行ふて、身心堅固の閨門に感受する効果は、筆硯の盡す事を得ざる、大なる効果である。然のみならず、此身心堅固の日本魂禪を日々行ふときは、身心堅固の爲めに、常識が發達して、閨門の紊亂するが如き、行爲を好まぬやうになる。猥りに妾を蓄へて漁色を爲すが如き、病的の行爲は、知らず識らずの間になくなる。是れ蓄妾も、漁色も要するに身心不調の病的發作であるから、身心堅固のものに此發作のあるべき理由がない。此日本魂禪は國家を廓清するのみにあらず、家庭の圓滿にする大功德がある。是れ余の實験に徴して、明かなる事實なることを斷言するのである。

大隈伯の百二十五歳説と此禪學療養

人は壽に生きず肉に生く

第十章 結 論 (肉と壽命と安心)

大隈伯は百二十五歳まで生きると断言して居らるゝこのことである。又世に人間の壽命は百歳と説きて、古人の五十年の常命、七十年の古稀を虚説だと笑ふ人も尠なくない。余が禪學療養を説く目的那邊にあるか。余は此療養の爲めに、壽命が長くなることも断言しなければ、百歳生きぬとも断言しない。斯の如きは、肉と壽命の關係を無視したる、推定である。因果を無視したる愚論である。

人は、壽に生きずして、肉に生きねばならぬ。壽は因果の命するところにして、如何ともすることを得ざる出来事である。假令百二十五歳生きると云ふも、死の命一度下らんか如何ともすることを得ぬ。百歳が人の常命と云ふも、五六十歳にて死ぬるものは澤山にある。假令如何なる療法、養生法を用ふるも、因果を回轉することは出来ぬ。生のごきに得たる死の果は、學理も實際も、何物も及ぶべからざる、公明正大の法則で、是に向つて説を爲すが、根本の誤解である。壽は壽に任せて、八十歳生きるも可なり、三

八十年生きんより三十年の肉を愛せよ

伊藤公爵は幸運兒か

十年にして死するも可なり、百二十五歳も亦可ならん、其壽の長短を論ずるは、無意味である。壽に長短を論せんよりも、此肉に生るがよい。壽は自己に如何ともすることを得ざるものなれども、肉は自己の自由である。自己自由の肉を研究して、始めて壽命なるものを解し得るのである。

肉に生きるものは、壽の長短の如きは論外である。八十年生きんよりも、先づ此三十年の肉を愛せよ。百歳生きんと希望するよりも、一日の肉を活動すると云ふ希望がなければならぬ。壽長きもの、果して幸福か、短命なるもの果して不幸か。千古の肉の、不生不滅を以て論すれば、八十歳の壽、果して長きか、三十歳の壽、果して短きか。肉は壽の長短に活動するものにあらずして、肉の肉たるに始めて活動するのである。少しく例を求めん。

伊藤公爵の肉の一代を幸運兒の歴史なりと説くものがある。是等の人は吉田松陰の三十歳の短命を、不遇兒と論じて居る。果して然るか。何故に伊藤公爵は幸運兒にして、吉田松陰は不遇兒なるか。一面より見れば、伊藤公は不運兒にして、吉田松陰が幸運兒な

吉田松陰の壽は
三十歳なれども
是れ千古

るかも、知れない。位人臣を極むる経路には、如何なる悲惨と、如何なる權謀と、如何なる罪惡が潜むかも知れない。表面の勳功赫灼が、裏面の醜穢なる手段より來らすことも斷言は出來ぬ。位の光明の爲めに、表面の罪惡現れず、表面の勳功が裏面の罪惡を償ひ得るか否かは、英雄の心緒の亂らるゝところである。故に表面の位人臣を極むるを以て幸運兒なりとは斷言は出來ない。吉田松陰が年三十にして、斷頭場裡の露と化するも、彼れに私心なき限り、光風霽月にして、身心を國家に捧げ、尊王の大義に任せて、其公明正大の肉に生き、己れの目的の爲めに、斃れたるが故に、吉田松陰としては不幸なるも、歴史の千古の肉としては、實に幸福と言ねばならぬ。壽に不幸なるも、肉に幸福である。若し吉田松陰が節を曲げ、幕府の爪牙に利用せられて、温き褥に寝ね、金銀綾羅に身を纏て、名譽と勳功の捕虜となれば、彼れは非常なる苦痛に相違ない。何故なれば彼の生れたるが勤王にあり、歴史にありしが故に、其目的に背反したる行動は、彼れの苦痛とせねばならぬ。苦痛に生きて名譽赫々たるよりも、目的に生きた斷頭場裡が、彼れの幸福である。即ち人は壽に生きずして、肉に生きねばならぬ。吉田松陰は壽に三十な

明日死するも、
生きる一日は健
全に安心せれば
ならぬ

れども、肉は三千年を一貫して、千古に生きたるが故に、非常なる幸福の人である。余は壽の長短に幸福を論ずるよりも、肉の長短に幸福を説くを適當と信するのである。以上の例に見れば、余の禪學療養を説くの目的は徒に壽命の長きを欲する爲めに説くにあらずして、肉の健全の爲めに説くのである。八十歳を得んと欲するは、八十歳の爲めに生きるにあらず。自己の爲めに生きるにあらず、此千古の肉に生きて始めて無病長生なる眞個の目的に到達するのである。唯八十歳とか、百二十五歳を生きたるも、其生きる理由が明かならぬのである。壽と肉の關係が密接して、壽に生きるもの肉に生き始めて禪學療養の目的は達し得らるゝのである。生るゝと云ふ事が、自他の超越したる出來ことなる以上は、死するも亦自他を超越したる出來ことである。故に、生死ともに、生死に任せるも云ふことが、眞理である。人は壽命は壽命に任せ、明日死するも、生きる一日は健全なる上に安心しなればならぬ、養生せねばならぬ。此健全なる爲めに禪學療養を説くものにして、長壽の爲めに説くのではない。長壽が健全の結果なりと言はゞ、長壽を論せざるも健全を論すれ

ば、自ら長壽になる。故に百二十五歳生きたるか百歳生きたるか云ふは、肉の爲めに壽命を説かず、壽命の爲めに肉を説くものにして、余の説とは根本を異にするのである。余は不生不滅に一貫したる肉を、日本人は日本人と云へる、歴史の上に生命を存するものにして、従つて百歳の壽も、百二十五歳の壽も、此歴史の出来事なるが故に、壽命を歴史に任せて、長短を論ずることの至當なるを信するのである。死の安心も又斯の如くである。

從來佛教の説く安心は、他土の往生である、極樂である。即身成佛を説く眞言宗も、娑婆即寂光浄土を説く禪宗も、此安心なるものは、國家にあらすして宗教である。其教に安心せよと説くも、國家に安心せよとは説かない。基督教の安心は、神の救ひである。佛教の安心は、佛の救ひである。宗教は何れより説くも、此生死廻轉の肉を、或る偉大なるものに救はるゝと説くのである。余は此安心に、安心なることを得ぬ。余は宗教に安心するよりも、國家に安心せよと説くのである。又此肉に安心せよと説くのである。吾等の肉は生が始めにして、死が終局なれば、吾等は他土に往生を願ふも可

なれども、吾等が今生れたるは、因なきに生れたるにあらすして、原因に依りて生れたのである。其原因なる物は、何物なるかと云ふに、吾等の國土である、國家である、先人である、先人の肉が吾等の肉の原因である。先人の行爲が、吾等の行爲を生ずる原因である。吾等は此先人の行爲を縁せずして生るゝことを得ず、先人の肉なくして生るゝことを得ぬ。吾等日本人のあるは三千年の歴史あるが爲めである。吾等は歴史を離れて、吾等の生すべき原因がないのである。其生るゝや、日本人は日本人の歴史に生れたる以上、日本人の死するや歴史に死なねばならぬ。生死ともに一日も歴史を離るゝことを得ぬ、國家を離るゝことを得ぬ。然るに歴史に安心せず、國家に安心せずして、他土の安心を説く、果して安心し得るか。

余は生るゝに、歴史に生れたるご自覺したる以上、死するも歴史に死するが故に、死に一點の疑問もなければ、一點の恐怖もない。吾の肉は三千年の間に生死往來して、今亦生死の往來なるが故に、生に一點も疑ない。疑なきが故に、死に一點も疑はない。死は壽命の盡きたる時にして、死して後何れに行くぞと、言へば。生るゝが歴史に生れた

極樂に往生せよ
いはる説ではな

る限り、死も歴史に死するが故に、死するや日本人である。生の日本人たるに、死の日本人たらざる理由がない。余は千古の日本人として、此生死あるに安心するのである。斯の如く説くときは、佛教に説く西方浄土に、往生すると云ふ、眞宗の安心の如きは、根本に於て余の安心と異なるが如き感想を生ずるのである。一は國家の安心にして一は浄土の安心である。一は因果の廻轉にして、一は往生極樂である。余の説く安心は肉にして、眞宗の説く安心は唯往生である。斯の如く天地懸隔の相違あるが如くなれども、是れ語に同じからずして、實に同じきことになる。

極樂に往生せよとは、國家を無視したる説ではない。又國家の外に極樂なる者の、實在を説くでもない、唯極樂に往生せよと説くのである。極樂と云ふ二字に、凡夫の自我を奪ふたるものにて、畢竟は極樂と云ふ、文字は主にあらず、凡夫の他の二見を起さいらしめざるが主である。其の他の二見を捨てよと云ふか、妄想を離れよと云ふか、説を爲すときは、雜念に雜念を加へて、自他の上に更に自他を論ずるが如き奇怪の安心となるが故に、其雜念を奪ひ盡して、念佛と爲し、其念佛其儘が極樂往生と説くので、畢竟する

に、極樂に往生せよとは、自我を奪ふ釣針に外ならぬのである。極樂に往生するよりも唯念佛を申すと云ふ事が、主にならねばならぬ。

此自他の二念を奪ひ、念佛三昧となりし時、個人は彌陀に攝取せらるるが故に、個人なるもの、實在は、否認せられて、不生不滅の緣起となる。緣起に自覺すれば、三千年否な、千古の緣起なるが故に生死あり、世界あれども、其の世界も生死も一緣起となる、是れ無量壽である。是れが極樂である。極樂は西方にも東方にも、世界至るところにある。日本人の極樂は日本國である。親鸞上人の、西方浄土は、日本の千古不變を、假りに西方と名附けたものである。故に西方、此を去ること遠からずと云ふか、娑婆即寂光浄土と説く、國家を西方浄土と説くは、有爲の國家を説かずして、無爲の清淨無垢を説くが故に、極樂浄土と名附たものである。要するに此慾望の人間界を、直ちに清淨無垢の浄土なるぞと、證明したのである。吾等は慾望の日本、修羅の清國と思へるを、佛は浄土なりと證明せられたのである。佛の目的は此人間を清淨無垢に因果を廻轉せしめんが故に、浄土と説き給ふのである。國家に安心せよと説くは、却て迷を深からしむる

二〇六
が故に、迷ひなき、思量の及ばざる淨土を建立したので實に國家を清淨に爲し、人間を清淨にせん爲めの、佛の大慈悲に外ならぬのである。余は是を直覺に、國家を拈じたるものにして、説くところ異なれども、其目的は一なるが故に、此千古の國家に安心すべく説くのである。

佛は何故に國家に安心せよと説かずして、淨土に安心せよと説きたるか。國家は各國政體を異にするものにて、一國殊に異なるものである。佛の教は各國平等にして、一慈悲である。獨り國家のみを説くにあらずして、草木禽獸蟲魚一切を濟度するが佛の目的である。慈悲である。故に佛の淨土と言へるは、此一切の、森羅萬象何物をも成佛せしむる爲めに、説きたるものにて、淨土の二字は、何物の往生をも包含する世界通有である。換言せば英國人にも淨土に往生せよと説く、日本人にも淨土に往生せよと説く。佛の此淨土に往生せよと云ふは、其國家に往生せよと云ふ義にして、英國人も、日本人も、集合する一の淨土なる實有のもの有つて、其處に往生せよと云ふのではない。然るに淨土に往生せよと云ふは、眞理同一なるが故に、一の實有なる淨土なるものを存在するが如

此國家が佛の淨土なるに於て始めて佛の慈悲を解する

く説きたるも、實を言へば、國家を離れて日本人の淨土なるものはないのである。佛は宇宙何物も、淨土に往生せしめんと説き給ふは、其事々物々の、眞理に任せしめんとこの慈悲にして英國人は英國人として英國に安心し、日本人は日本人として日本國に安心せしめ、禽獸は禽獸にして、各々の面目に住して、安心立命せしむるが、佛の慈悲である。佛の淨土は洋の東西なく時の古今なれども、佛の淨土に往生するものは、各國異ならねばならぬ。其國家が淨土なるに於て、始めて佛の慈悲を解するのである。余が國家に安心すると云ふは、佛の淨土を、差別の上に解したるものにして、佛が西方淨土に、安心せよと仰せらるゝを、私は西方に安心しましたと云ふが、國家に安心したと云ふ事になるのである。故に、親鸞上人の西方極樂淨土に安心せよと仰せらるゝも、余が國家に安心すると云ふも、結論は同一である。要するに、此肉を千古の歴史に自覺するが、往生極樂の本懷を解けたのである。斯の如く、國家に安心して、死に恐怖ありや、大死一番し來れば、大生一番し來ると同一にして、生も死も日本人なれば、此死は終局にあらずして、唯緣起の往來である。此

肉の往來に大悟せば、余が禪學療養の本面目を解するの人の云ふべきである。

二〇八

禪學療養終

明治四十五年三月五日印刷發行
大正五年七月一日再版印刷發行

(禪學療養)
定價金壹圓

印鑑なき者



は偽本とす

印	印	發著
刷	刷	行作
所	者	者兼
		茂公田中菊治郎
	山	
	上	
	貞	
	一	
中央堂印刷所		

發行所

大阪市東區今橋二丁目四十三番地
合資會社
不老禪室

振替貯金口座大阪一四一七八番
電話本局長一一六五番

訂正再版
大德管長見性宗般禪師題字
其心居士 田中茂公著

家庭と開運

菊版百頁 定價壹圓 郵稅八錢

● 則十運開
 一 自己の身體は運命の表彰なること
 二 自己の短所を知ることを修養すること
 三 自己の境遇を自覚すること
 四 自己の和を察すること
 五 自己の和を察すること
 六 自己の天贈の職業を察すること
 七 自己の天贈の職業を察すること
 八 自己の天贈の職業を察すること
 九 自己の天贈の職業を察すること
 十 自己の天贈の職業を察すること

▲ 緒言 ▲ 第二 ▲ 先天の運
 一 先天の運と後天の運
 二 先天の運と後天の運
 三 先天の運と後天の運
 四 先天の運と後天の運

大阪東區今橋二丁目四番八七
 不老禪室發行 電話本局一六五番

田中茂公著

住宅運命大觀

菊版五百三十三頁 裝金文字本製定價參圓郵稅貳錢
 壹千部に特限價金貳圓五錢

● 本書目次 ● 緒言 ● 住宅と意思
 ● 住宅と常識 ● 住宅と陰陽の方
 ● 中心論 ● 地相住宅中心
 ● 土藏の位置 ● 附屬物の
 ● 調和 ● 位置 ● 外務省と其
 ● 早稲田女子大 ● 岩倉公家
 ● 阪市發達町の運命 ● 大
 ● 五月十六日の大阪毎日新聞第九頁の評論
 ● 住宅運命大觀(田中茂公著)に住宅運命觀、移轉運命觀の二書を著し
 ● 獨りて住宅運命の交渉を適切に説明した著者は、其後致々として群籍を涉
 ● 獵して、住宅運命の研究を怠らざるに、湖ぼりて住宅運命の關係を詳説すべく
 ● 本書を公にして、更に、本に湖ぼりて住宅運命の關係を詳説すべく、
 ● 眼を公にして、更に、本に湖ぼりて住宅運命の關係を詳説すべく、
 ● 上の問題に、更に、本に湖ぼりて住宅運命の關係を詳説すべく、
 ● 子大、大阪、東區、今橋、二丁目、四三、番、八七、(定
 ● 此評論にて明かに本書の價值に表彰がある

大阪東區今橋二丁目四番八七
 不老禪室發行 電話本局一六五番

第五版
乃木大將簡書
田中茂公著

住宅運命觀

菊判二百頁 定價十七錢郵稅八錢

自己の運命に疑ひを抱ける人は直に自己の住宅を見よ。善き運命も悪しき運命も歴然と住宅に現はるか。如之を本書に知れ。

幾度も失敗する人幾度も不幸の續く人は其惡運命の廻轉を求むる爲住宅を轉せよ。是れ成功の秘訣なり。之を本書に問へ。

大阪府知事 住友吉左衛門
 大谷光瑞 森下仁丹
 新界ルナパーク 梅原龜七
 藤田男爵 大阪朝日新聞

住宅或は店舗を新築せんとする人は深く注意せよ。地相家相完全なれば一家必ず幸福に注ぎ繁昌すべし。本書之を證明す。

移轉せんとする人は先づ自己の運命と方位に注意せよ。而して完全にして幸福多き住宅を撰擇するに全本書之を指導す。

大阪市東區二丁目三番地 合資會社 不老禪室發行 電話本局一六五番

第四版
家相と地相の哲理的新書
田中茂公先生著

移轉運命觀

菊判三百頁 定價壹圓廿錢郵稅八錢

移轉には住宅を選定せよ。本書は種々の模範圖面にて之を示せり。

移轉には方位に着眼せよ。本書は多數の實例を以て之を説明せり。

故に先づ本書を一讀せよ。

移轉には好機を利用せよ。本書は一目瞭然に其の撰擇を教へたり。

移轉には原因に注意せよ。本書は最も明快に之を解決を與へたり。

故に先づ本書を一讀せよ。

家相に八位あり。曰く、主人位、妻位、活動位、財位、健康位、安位、向位、表位、活及ぶ位。八部の運命は此の八部に表象せらる。八部の運命は如何なる働きをなすか。八部の運命は如何なる働きを説明すべし。立所に之を見よ。三十餘頁に亘る。

大阪市東區二丁目三番地 合資會社 不老禪室發行 電話本局一六五番

不 老 禪 室
田 中 茂 公 著

人相運命觀

菊 版 百 四 十 八 頁 定 價 七 十 錢 郵 稅 六 錢

田中茂公は本書の緒言に、人相の善惡を以て人の運命を判断するの術は、支那に於ても、随分大昔からであるが、觀相術の鼻祖は印度の達磨大師であると言つた人がある、神相全編にも此語がある、余はこの達磨大師の人相開發説に大に興味を有する者であると言つてある、然して本書は「人相極秘三要靈應之傳」の寫本を根本として、田中茂公の識見に説いたものである、目次は
(一)本傳の由來、(二)觀相の心得、(三)體の三才の傳、(四)三體三才九觀の傳、(五)君臣の傳、(六)親縁の厚薄を知るの傳、(七)妻縁の變るか否かを知るの傳、(八)至誠の心ある相を知るの傳、(九)發達する人の相を知るの傳、(十)發達せざる者の相を知るの傳、(十一)運氣強き人の相を知るの傳、(十二)人の才知と愚痴とを知るの傳、(十三)人の師となるべきを知るの傳、(十四)開運する人か否かの相を知るの傳、(十五)運勢強く長命の相を知るの傳。
此十五項を、第十六項より明かに説いて百項までに菊版百三十八頁まで説いてある、本書を一讀せられたならば、他人の相を觀察して頗る趣味があることを斷言します、

大 阪 市 東 區 今 橋 二 丁 四 三 番 會 社 資 不 老 禪 室 發 行 會 社 資
大 阪 市 東 區 今 橋 二 丁 四 三 番 會 社 資 不 老 禪 室 發 行 會 社 資
電 話 本 局 一 一 六 五 番

不 老 禪 室
田 中 茂 公 著

姓名運命觀

菊 版 百 五 十 五 頁 定 價 七 十 錢 郵 稅 六 錢

田中茂公第一章に「姓名考とは何ぞ」と此問題を解決して居ります、此語に姓名運命觀に就ては凡そ三種の研究法がある、第一が近頃流行の、意義と天地と、乾坤と、五行と、名の字劃運數と、合姓名の運數と此六個條より説くのであります、第二が易理を根本として字劃と人の相生相尅に根柢を置いて、乾兌離震巽坎艮坤の八卦を以て其人の姓名の運命を説くのであります、第三が其源を梵字に發し佛教を根本として其人の生年月日に依つて、韻鏡より説くのであります、始め弘法大師が主唱して秘密にて眞言宗に傳つて野洲の盛典が出版した。
田中茂公は此韻鏡命名の實例を、(一)加藤高明男爵(二)前陸軍大臣岡市之助氏、(三)海軍中將八代六郎氏大藏大臣武富時敏氏、若槻禮次郎氏、司法大臣尾崎行雄氏、農商務大臣河野廣中氏、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞を實例にしてあります。
田中茂公は此韻鏡の命名法には頗る苦心して、今日でも命名と實印の鑑定には、必ず韻鏡の歸納、倒反に依るので、康熙字典と、玉篇との二書あらざれば、文字の韻劃を知り得ぬのであります、之を一讀せられたならば姓名と運命は明かに其趣味を解決し得るのであります。

大 阪 市 東 區 今 橋 二 丁 四 三 番 會 社 資 不 老 禪 室 發 行 會 社 資
大 阪 市 東 區 今 橋 二 丁 四 三 番 會 社 資 不 老 禪 室 發 行 會 社 資
電 話 本 局 一 一 六 五 番

不 老 禪 室
田 中 茂 公 著

火災運命觀

菊版百十頁 定價十五錢 郵稅六錢

本書は田中茂公が大正元年に住宅運命觀を著して、住宅と運命に就ての吉凶を詳論し、實例を以て、之を深く論じたが、其研究の結果、火災と運命に一層趣味を感じて本論を書いたのである、火災と防火に運命上の詳論を爲して、左の事實を立證して方位上の恐ろしさを研究して居る、目次は

(一)大阪の大火と其系統、(二)東京市の大火と其系統、(三)岸和田紡績分工場の火災、(四)三井物産神戸支店の火災、(五)名古屋田中織物工場の火災、(六)大阪瓦斯會社岩崎工場の火災、(七)阪堺電車事務所火災、(八)大倉組大阪支店の火災、(九)大阪回生病院の火災、(十)東京芝増上寺の火災、(十一)能登曹洞宗本山總持寺の火災、(十二)播州清水寺の炎上、(十三)火災の起點を知れ、

斯の如く火災と系の方位を説いて之を明かにする爲め圖面五個を以て出火の方位を示し、運命上の火災の其位置に確實なる表象あることを立論したのであります、之を讀で事實の立證に驚かぬ人はあるまい。

大阪東區今橋二丁目四番三
不 老 禪 室 發 行 會 社
電話本局一六一五番
振替口座一四七一八番

住宅、會社、工場、設計建築部設置

運命主幹 田中茂公
技師 萩原三平
設計主幹 工學士眞水英夫
技師 湊嘉一
技師 久保田繁亮

田中茂公は住宅運命觀を明治四十五年に發刊して五版五千部、移轉運命觀を大正元年に發行して四版四千部、住宅運命大觀五百二十二頁を大正五年に一千部を發行して建築物と運命との關係を明かにし、凶相に凶相を現じ、吉相には吉相を現する、事實

上の實例を詳細に擧げて、大隈伯邸、大阪府知事官舎、早稻田大學、女子大學、外務省、岩倉公爵、乃木大將等殆んど三十餘の實例を擧げて、其運命の存在を論及す、建築物は、相即眞理と、住宅と意思、住宅と常識、住宅と陰陽の方則、地相と建築物との中心論などを三書に詳論して、其運命を明かにして居る。

田中茂公の今日までに設計に鑑定したる其大要を擧げると現在に於て最も活動せらるゝ方のみである、其例を擧げると、大阪天滿の埧場發明者の中辻氏の大工場、大阪市安土町井上系店のカタン系の大工場及び

井上第一工場の高瀬氏の新築邸宅、井上氏の別荘、大阪市南區墨屋町の西洋食器、硝子器、洋食用陶器、諸金屬品の製造で輸出活動の森高氏の工場、京都市新町通り二條日本捺染として彫刻發明者武田氏の大工場及び邸宅、紀州和歌山市の吉田醫學士の吉田病院、同所明樂氏の齒科醫院、住宅は、神戸市元町貿易商製油商の藤田氏の新邸、生島御本家の別邸、元町の西洋織物反物直輸出の田中氏の邸宅、大阪市土佐堀機械輸出の日和商會主の小島氏の新築邸宅、鳥取市川端町運送業の由谷氏の新築邸宅、同市大正鳥取銀行の頭取小田氏の邸宅新築、新潟市の製油業淺田氏の新築邸宅、新潟縣東浦原郡五十島驛の造林、種蓄牛乳粉の發明大家旗野氏の工場及び邸宅、尾之道市外

濱の人造肥料發明の橋本氏工場及び邸宅等
で之は大活動方の一部である。

今回眞水工學士の學術上の建築設計と田中茂公の運命上の見地とを相合して、住宅、工場、會社其他の建築物に、完全なる設計を爲し、又運命上の鑑定を爲して、住宅其他の建築物に活動と家庭の團樂を表象して熱心に設計、運命に調和せんとす、今回此設計部を設置したるの趣意である。

大阪市東區今橋二丁目三井物産前

不老禪室田中茂公

電話長本局一六五番

大阪市北區眞砂町四十二番地

眞水三橋建築事務所

電話北一〇一三番

297
808

終